

フジツボとカメノテ



水族館へ行こう!

京都大学白浜水族館

15

大和 茂之

「フジツボという生物について、どのようなことを思い浮かべるだろうか。紀南地方に住んでいる人ならば、噴火口よ

見掛ける機会があると思う。「せえ」「せい」と呼ばれ、珍味としてもてはやされるカメノテも、フジツボの仲間だ。

白浜水族館では、クロフジツボとカメノテ、タカアシガニの甲羅に付いているエボシガイの仲間を観察することができ

る。殻のすき間から網のような足を出し入れしている。リズムは種類によ

あるか？」というのは、臨海実習でよくやる解剖のテーマだ。蔓脚は6対あり、各足は二又に分かれている。一番後方に対応していないのが生殖器で、これを伸ばして隣接の個体と交尾する。一方、体の側面には黄色い卵の塊を抱いている。つまり、雄と雌の機能が同一個体に備わった雌雄同体である。

くっついて生きて

ふ化した子どもは、ノープリウス幼生としてプランクトン生活を

うなクロフジツボ、ゴマ粒のように小さなイワフジツボ、養殖いかだに付いたアカフジツボなどを

殻のすき間から網のような足を出すカメノテ
(水槽番号209)

するし、本体に足が付いていることから分かるだろう。

また、いったん岩にくっいたら移動することはない。甲殻類で唯一、固着生活をする動物である。海綿やサンゴ、他の甲殻類、ウミガメ、クジ

らなど、多様な動物と共に生している種類もいる。

解剖してみると、その足は、植物の巻きひげのようになっているので蔓脚類(まんきやくるい)と呼ばれる。「足が何本

した後、キプリス幼生となって付着場所を見つけて、岩にただくっついていくだけのように見えるフジツボ類だが、そこには海洋生物としての面白さが詰まっている。
(京都大学助教)